

はじめに

沖縄県は、日本、アジア大陸及び東南アジアの中間に位置し、亜熱帯海洋性の温暖な気候の下、一年を通してみどりの豊かな土地であり、多様性豊かな森林や沖縄特有の自然環境を有している。また、都市部を彩る街路樹には熱帯性の樹木が多く利用されている。

特に、やんばると呼ばれる沖縄島北部の森林には、希少な動植物が数多く生息しており、平成 28 年には国立公園に指定された。現在、西表島を含む八重山諸島とともに世界自然遺産への登録を目指しているところであり、将来にわたって維持・管理されることが期待されている。

このようなみどりは、県土や自然環境の保全に寄与しているだけでなく、歴史・文化的な価値を有するとともに、沖縄独特の景観づくりに貢献しており、観光産業の振興や地域の活性化に大きく寄与している。

一方で、沖縄の自然・景観を構成する多様な樹木には、熱帯や温帯で発生している病害虫が新たに侵入する可能性があり、これまでもキオビエダシヤクや松くい虫、デイゴヒメコバチなどの侵入病害虫によって甚大な被害を受けてきた。

イヌマキに発生して枯死に至らしめるキオビエダシヤクは、昭和初期から発生が確認されており、イヌマキの造林面積の拡大とともに被害量は増大し、未だに終息に至っていない。また、リュウキュウマツを集団枯損させる松くい虫も侵入病害であるが、今も沖縄島北部を中心に甚大な被害をもたらしている。このように、一度侵入し、定着した病害虫の被害は終息していないことが多い。

また、本県の経済的な活性化による人や物の移動の増大は、病害虫の侵入及び拡大のリスクを飛躍的に高める副次的な作用がある。

これらの新興・再興病害虫による被害を防止するためには、病害虫の発生を早期に発見し、個々の発生場所に適した対応が必要である。森林地域と人間活動の周辺、沖縄島北部地域と離島地域では、樹木の分布や環境条件が異なることから被害の発生リスクも異なると考えられ、それぞれに応じた防除方法を示しておく必要がある。

さらに、早期の診断が被害拡大を防ぐことに繋がることから、病害虫の発生消長や発病機構などを理解することが重要となる。



沖縄島北部「やんばる」の森